

芥川龍之介と『タイス』

— 手沢本に見るアナトール・フランス受容の諸相 —

安 陪 岳

一、はじめに

アナトール・フランスは、芥川龍之介がその文学を形成するにあたって、強い影響を受けた作家の一人である。両者の関係については、これまで多くの先行研究が積み上げられてきた。その端緒と云えるのは一九三四年九月の『浪漫古典』に発表された根津憲三「アナトール・フランスを通して見た芥川龍之介」である⁽¹⁾。根津はまずA・フランスと芥川に都会人かつ読書人という共通の性質を見出したうえで「主知主義より懷疑主義を経て厭世主義に至」った思想的過程に共通点を見出した。また、「西郷隆盛」「南京の基督」といった具体的な芥川作品名を挙げ、A・フランスの影響を指摘している。一方で根津は両者の相違点についても強調している。即ち、A・フランスが「楽観的厭世主義者」であったのに対し、芥川が「悲観的厭世主義者」であったと述べ、作品の傾向についてもA・フラン

スは「全体に於て叙事詩的精神である」のに対し、芥川は「寧ろ抒情的精神である」と述べている。以上を踏まえ、両者の思想や作品の間に「如何ともし難い懸隔」があるとし、その根底に「西方人と東方人との精神の相違」を見て、両者の類似は「極めて顕著でありながら、而も、案外皮相的なものではないかと思はざるを得ない」と結論している。この論における「西方人と東方人との精神の相違」の強調は一九三四年という時代状況を考慮しなければならぬが、単にA・フランスの影響を指摘するに留まらず、相違点にまで言及した点は評価できる⁽³⁾。

戦後になると、『タイス』の「きりしとほろ上人伝」(『新小説』一九一九・三)への影響を指摘した安田保雄⁽⁵⁾、「聖女ユウフロジヌ」の「奉教人の死」(『三田文学』一九一八・九)への影響を指摘した森啓祐⁽⁶⁾など、A・フランス作品から芥川作品への具体的な影響関係を新たに指摘する論が見られる。その他、芥川がA・フランスに言及した資料をまとめた広瀬朝光⁽⁷⁾や、芥川がどの程度A・フラン

スの作品を読んでいたかを具体的に考察した本多文彦⁽⁸⁾の論がある。

以上のように、A・フランスから芥川龍之介への影響をめぐっては、比較文学の視点から両者の思想・作品の類似点／相違点などが論じられ、創作への具体的な影響を考える論も蓄積されてきた。しかし、これらの先行研究を見渡したとき、一つの盲点を見出さずにはいられない。即ち、芥川におけるA・フランスの受容を考える際に、芥川が実際に読んだ手沢本の調査といった実証的な研究が看過されてきたことである。周知の通り、芥川の旧蔵書は日本近代文学館に芥川龍之介文庫として所蔵されており、多くのA・フランスの作品が含まれている。

近年では、日本近代文学館より『芥川龍之介文庫目録 増補改訂版』(二〇二二)が刊行され、芥川龍之介文庫の洋書に関して悉皆調査を行った澤西祐典により『芥川龍之介における海外文学受容 旧蔵書越しに見える風景』(ひつじ書房、二〇二五)が出版されるなど、芥川龍之介の海外文学受容を考えるうえで蔵書研究は前提となつたと言える。

本稿はこうした観点に立ちながら、A・フランスと芥川の関わりを『タイス』という一つの作品の受容から考えてみたい。『タイス』は芥川がA・フランスの作品中、英訳で読んだ最初の作品であり、『仏蘭西文学と僕』(『中央文学』一九二二・二)のなかで「今でもフランスの著作中、一番面白いのは何かと問はれば、すぐに僕は『タイス』と答へる」と述べるなど、芥川におけるA・フランスの

受容を考えるうえで重要な作品であると言える。本稿ではまず第二節で丸善を通じた、一九〇九年に始まるA・フランスの英訳本の輸入について確認したうえで、芥川龍之介文庫所蔵の手沢本『タイス』⁽⁹⁾が日本で初めに流通した『タイス』の英訳本であるロータス・ライブラリー版ではなく、やや遅れて日本に輸入されたボドリー・ヘッド版『アナトール・フランス作品集』の一冊であることを指摘し、その出版の経緯を確認する。以上を踏まえたうえで、第三節と第四節では日本近代文学館に所蔵の手沢本『タイス』の書き入れから芥川がどのように『タイス』を受容したかを具体的に考察する。芥川龍之介はどのように『タイス』と出会い、それを読んだのか。本稿ではその問いから見えてくる諸相を明らかにしたい。

二、芥川が読んだボドリー・ヘッド版

『タイス』について

日本におけるA・フランスの受容について網羅的な研究を行った唄修は、A・フランスの紹介が新聞紙上などで明治二〇年代からあるものの、丸善を通してボドリー・ヘッド版『アナトール・フランス作品集』などの英訳本が輸入される一九〇九(明治四二)年までの約二〇年間は「まだ組織的輸入の段階には達せず、フランス語を理解し得る少数の文学者のみが、その芸術的芳香のいくばくかをたのしんだにすぎない」とし、フランス語以外では「当時、輸入せら

れていた英文誌、英文学書などからその名声を知り得たにすぎない」と述べている。⁽¹⁰⁾

丸善の広告誌『学鑑』を参照すると、A・フランスの英訳本の最も早い輸入は一九〇八年二月号の「MONTHLY CATALOGUE OF THE MARUZEN-KABUSHIKI-KAISHA」欄（以降、便宜的に「洋書カタログ欄」と呼ぶ）に掲載された、アーネスト・トリスタン（Ernest Tristan）訳の『タイス』であるようだ。これはロンドンの Greening and Co. からロータス・ライブラリー（Lotus Library）の一冊として刊行されたものである。また、同年一月に発行された『太陽』（博文館）の臨時増刊「現代の代表的人物」には、ヨーロッパの著名な作家と並んで「アナトール・フランス氏」と題した紹介文が載り、日本におけるA・フランスの紹介・宣伝もこの一九〇八年末ごろより本格化した。

翌一九〇九年一月号の『学鑑』にはボドリール・ヘッド版『アナトール・フランス作品集』の広告が載り、いずれも一九〇八年に刊行の四作品、即ち『シルヴェストル・ボナールの罪』（*The Crime of Sylvestre Bonnard*）、『赤い百合』（*The Red Lily*）、『エピクロスの園』（*The Garden of Epicurus*）、『螺鈿の手箱』（*Mother of Pearl*）の販売が始まる。

それでは、こうした一九〇九年ごろより本格化する、日本における英訳本を通じたA・フランスの受容のなかで、どのように芥川は『タイス』を手を取ったのだろうか。

手がかりとなるのは芥川が後年に自らとフランス文学の関係を記した「仏蘭西文学と僕」の次のような記述である。

僕は中学五年生の時に、ドオデエの「サツフォ」と云ふ小説の英訳を読んだ。（中略）まあ好い加減に辞書を引いては、頁をはぐつて行つただけであるが、兎に角それが僕にとつては、最初に親しんだ仏蘭西小説だった。（後略）

それからアナトール・フランスの「タイス」と云ふ小説を読んだ。何でもその頃早稲田文学の新年号に、安成貞雄君が書いた紹介があつたものだから、それを読むとすぐに丸善へ行つて買つて来たと云ふ記憶がある。（中略）——これも僕が中学の五年生の時分だった。（安陪注——省略は引用者による）

ここで芥川は自らが『タイス』を知るきっかけとなったのは「早稲田文学の新年号」に書かれた安成貞雄による紹介であったとしている。しかし、実際には第二次『早稲田文学』第三八号（一九〇九年、以下『早稲田文学』は第二次を指す）の附録「歐洲近代名著梗概」に掲載された生方敏郎「アナトール・フランス作『タイイス』」のことを指していると思われる。安成貞雄は同欄に「ズウデルマン作『マグダ』」という別の作品の紹介を担当しており、安成貞雄が「早稲田文学の新年号」で『タイス』を紹介したという事実は確認できない⁽¹¹⁾。最も、安成貞雄は『早稲田文学』の一九〇九年九月号に

「アナトール・フランス英訳書目」を掲載しており、この「英訳書目」にはボドリー・ヘッド版『アナトール・フランス作品集』の一覧（未刊を含む）に加え、ボドリー・ヘッド版以外の英訳書やA・フランスに関する伝記、評論等の英語書籍も多数紹介されており、芥川が目を通した可能性は低くない。芥川はこの安成貞雄による「英訳書目」の印象が強かったために、生方敏郎による『タイス』の紹介が安成によるものとして、記憶が上書きされたのかもしれない。

また、引用した「仏蘭西文学と僕」の後半、この『タイス』の紹介を読んで「すぐに丸善へ行つて買つて来た」という記述にも注意が必要である。というのも、芥川龍之介文庫に所蔵のボドリー・ヘッド版『タイス』は、生方敏郎が『早稲田文学』誌上で『タイス』を紹介した一九〇九年一月時点では日本に輸入されていなかったと考えられるからである。前述した通り、一九〇九年一月号の『学燈』で広告されたボドリー・ヘッド版『アナトール・フランス作品集』の巻目は、いずれも一九〇八年刊行の『シルヴェストル・ボナールの罪』、『赤い百合』、『エビクロスの園』、『螺鈿の手箱』の四作品であり、ここに『タイス』は含まれていない。また、『タイス』がボドリー・ヘッドから刊行されたのは一九〇九年であり、新年早々の一月時点で日本に輸入されていたとは考えにくい。管見の限り、ボドリー・ヘッド版『タイス』が『学燈』の洋書カタログ欄に載るのは同年七月号に「SUMMER READINGS」の一冊として推薦されているのが初めてであり、七月ごろまでは輸入されていなかったの

ではないかと推測される。

仮に芥川が『早稲田文学』誌上での生方敏郎による紹介を一九〇九年一月時点で読み、「すぐに丸善へ行つて買つて来た」のであれば、それはボドリー・ヘッド版『タイス』以前に輸入されていた『タイス』、即ち前述したロータス・ライブラリー版の『タイス』であったことになる。こうしたことから先行研究でも芥川がこのロータス・ライブラリーで『タイス』を受容したとする記述が散見される¹²⁾。本稿は芥川がこのロータス・ライブラリー版の『タイス』も読んでいた可能性を否定するものではないが、芥川龍之介文庫で所蔵が確認できるのはボドリー・ヘッド版『タイス』のみである。芥川は『早稲田文学』一九〇九年一月号に載った『タイス』の紹介を一月時点で読んだのではなく、恐らくは同年の七月頃に読み、その時期には既に輸入されていたボドリー・ヘッド版『タイス』を入手したと考えるのが妥当であろう。

以上、芥川がボドリー・ヘッド版『タイス』を入手するまでの経緯について述べた。それではここで、芥川が読んだ『タイス』を含む『アナトール・フランス作品集』(*The Works of Anatole France in an English Translation*) について確認しておこう。これはロンドンのボドリー・ヘッド (The Bodley Head) が一九〇八年より順次刊行した作品集であり、ボドリー・ヘッドはジョン・レーン (John Lane) が Charles Elkin Mathews とともに一八八七年に設立した出版社である。のちにジョン・レーンの甥にあたるアレン・レーン

(Allen Lane) とその兄弟が独立し、大手出版社ペンギン・ブック (Penguin Books) へと発展したことはよく知られている。

巻末に記載された広告によれば、各巻は二巻本の『ジャンヌ・ダルクの生涯』(*The Life of Joan of Arc*) を除いて六シリングで販売、寸法はデマイ判八切(九×五と四分の三インチ)。装丁は天金で、見返しはオーブリー・ビアズリー (Aubrey Beardsley) のデザインを採用している。ビアズリーはボドリー・ヘッドから一八九四年に刊行されたオスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』の英訳版の挿絵を担当しただけでなく、同社が同年に創刊した『イエローブック』誌の美術編集を翌年の第五巻まで担当するなど、ボドリー・ヘッドとは一時期、深い関係にあった。ビアズリーは一八九八年に亡くなっており、『アナトール・フランス作品集』の刊行開始時には既に故人だが、見返しのデザインは『イエローブック』時代にビアズリーが描いたものを再利用したものかも知れない。また、巻末に記載されていない装丁についても述べておくと、表紙・裏表紙・背表紙ともに赤の紙製であり、表紙には「作品名(英語) BY ANATOLE FRANCE」と記し、その下にA・フランスの横顔を「MAISTER ANATOLE FRANCE」という文字列で囲んだメダル風の紋章を入れ、カーテン風の装飾を施している。書名・作者名・紋章・装飾は全て金地である。

このボドリー・ヘッドによる『アナトール・フランス作品集』の刊行を当時のA・フランスの英語圏における翻訳の状況のなかに位

置づけ、評価することは本稿の範囲を超える。ただ一点述べておけば、この作品集はそれまで単発的な作品ごとの出版に留まっていたA・フランスの英訳を組織的に翻訳・出版した点において画期的であった。具体的には『シルヴェストル・ボナールの罪』や『赤い百合』、『タイス』といった長編小説に留まらず、短編集である『バルタザール』(Balthazar) や『螺鈿の手箱』、社会批評的作品『エピクロスの園』、二巻にわたる伝記作品『ジャンヌ・ダルクの生涯』など幅広いジャンルの作品を収録している。また、翻訳者としても、編集責任者であるフレデリック・チャップマン (Frederic Chapman) ほか、二人の翻訳者の名前が掲げられ、この作品集の翻訳事業の規模の大きさが窺い知れよう。

『タイス』に限って述べれば、フランス語の初刊はパリの Calmann-Lévy から一八九〇年に刊行、ボドリー・ヘッド版の英訳は、『アナトール・フランス作品集』刊行開始の翌年である一九〇九年の刊行であり、翻訳者はロバート・B・ダグラス (Robert B. Douglas) という人物である。管見の限り、この人物についての詳しい伝記は無いが、一九〇一年にロンドンのチャールズ・キャリントン (Charles Carrington) が同じくロバート・B・ダグラスの訳による『タイス』を刊行しており、このボドリー・ヘッド版『タイス』はチャールズ・キャリントン版『タイス』の再録と考えられる¹³⁾。

以上、本節では一九〇九年に刊行されたボドリー・ヘッド版『タイス』を芥川が手に取るまでの経緯を確認したうえで、『タイス』

を含む『アナトール・フランス作品集』について書誌的な情報を述べた。次節では以上を踏まえ、芥川が『タイス』をどのように受容したかについて、芥川龍之介文庫に所蔵の手沢本の書き入れから分析したい。

三、手沢本の書き入れと懷疑主義の胚胎

本節ではまず、議論の前提として、『タイス』のあらすじを述べておこう。本作は第一篇「白蓮」、第二篇「紙草」（途中「饗宴」と題した部分が挿入）、第三篇「とうだいぐさ」の全三篇からなる。¹⁴

時代は四世紀、舞台はローマ帝国支配下のエジプト。ナイル川沿岸のテーベに住むアンティノエの修道院長、パフニユスは禁欲と懺悔の生活を続け、周りの修道士の尊敬を集めていた。パフニユスはある日神からの啓示を受け、アレクサンドリアの高級娼婦・女優であるタイスを墮落から救うために旅に出る。途中、隠者ティモクレスと出会い、問答を交わすなどしつつ、アレクサンドリアに着いたパフニユスは旧友のニシアスを訪ねる。その後、タイスの出演する劇を観たパフニユスはその足でタイスの家を訪ねる。（以上、第一篇）

第二篇ではまず、タイスの生い立ちと現在までの遍歴が描かれる。タイスのもとを訪れたパフニユスは彼女にキリストの愛を説き、タイスは信仰の道に入ることを決める。パフニユスはタイスに連れられて海軍長官であるコッタの主催する饗宴に出席する。その場には

ニシアスほか、様々な知識人が出席しており、キリスト教や善悪に関する議論が行われるが、議論に興奮した出席者の一人、ユークリイトが自殺するに至る。饗宴の場に耐えかねたパフニユスはタイスを連れてその場を後にし、彼女に修道院に入ること、その前に家財を全て焼却することを迫る。タイスは奴隷に命じて邸宅前の広場であらゆる家財を焼き始めるが、タイスと利害のある者に扇動された群衆はパフニユスを殺害しようとする。パフニユスとタイスは饗宴の帰りに通りかかったニシアスの機転で救出され、二人はアレクサンドリア近郊の女修道院に辿り着き、パフニユスは修道院長のアルビヌにタイスを託す。（以上、第二篇）

目的を果たしテーベに戻ったパフニユスは弟子たちに歓迎されたが、タイスの幻影に苦しめられ、安らぎは訪れない。夢の啓示に従うことになったパフニユスは古代エジプト文明の廃墟に辿り着き、円柱の残骸の上で苦行を始める。やがて彼の苦行と奇跡の噂は広まり、その地は人々の集う聖地となる。しかし、夢の啓示が悪魔によるものであったことを悟ったパフニユスはその地を離れ、放浪の末に古代の墓場に住み着くようになる。墓の壁に描かれた女の絵にタイスを見出した彼は信仰への懷疑に陥り、イエスの人間性を認めるに至って気を失う。通りがかりの一行に助けられたパフニユスは、その一行が臨終の近い聖者アントニウスのもとへ向かうことを知り、随行する。アントニウスの臨終の場で修道士のポールはタイスの死が近づいていること、パフニユスが悪魔へ寝返ったことを皆に告げ

る。タイスの死に近いことを知ったパフニユスは、彼女のいる女修道院へと向かう。これまでの宗教的生活を悔い、タイスとの愛に生きることを決心したパフニユスだったが、愛の告白も虚しく、タイスはパフニユスの腕の中で死ぬ。(以上、第三篇)

水野和一の言葉を借りれば、本作は「一人の聖僧が女を救はんとして奈落に落ちゆく靈魂の歴史を描いた」⁽¹⁵⁾物語と要約して良いであろう。但し、本作はパフニユスとタイスの物語を主軸にしつつも、パフニユスがアレクサンドリアに向かう途中で出会う隠者ティモクレスとの問答や、アレクサンドリアの饗宴の場での知識人たちの議論など、A・フランスの哲学や宗教をめぐる思索が彼らの言葉を借りて展開されている点も大きな特色となっている。この点で、本作は上田敏が評するように「Conte Philosophique」⁽¹⁶⁾つまり「哲学的物語」としての性格を持ち合わせている。

それでは、芥川はこの『タイス』をどのように読んだのだろうか。前節で引用した「仏蘭西文学と僕」で彼は次のように述べている。

この本(安陪注―『タイス』を指す)は大いに感服した。(今でもフランスの著作中、一番面白いのは何かと問はれれば、すぐに僕は「タイス」と答へる。その次に「女王ベドオク」を挙げる。名高い「赤百合」などと云ふ小説は、更にうまいと思はれない。)尤も議論の面白さなどは、所々しか通じなかつたらしい。しかし僕はタイスの行の下へ、無暗に色鉛筆の筋を引い

た。その本は今でも持つてゐるが、当時筋を引いた所は、ニシアスの言葉が一番多い。ニシアスと云ふは警句ばかり吐いてゐるアレクサンドリアの高等遊民である。――これも僕が中学の五年生の時分だつた。

筆者は今回、こうした芥川の記述について確かめるために、日本近代文学館の芥川龍之介文庫所蔵の手沢本『タイス』(日本近代文学館の請求記号はA178925)を閲覧した。芥川は『タイス』を「今でもフランスの著作中、一番面白い」と称賛しつつ、「尤も議論の面白さなどは、所々しか通じなかつたらしい」と述べているわけだが、手沢本を見て感じた第一の印象は単語に関する書き込みの多さである。第一篇から第二篇にかけて、多くの英単語に意味が書き込まれており、芥川にとって『タイス』が決して易しい本ではなかつたことが覗かれる。

芥川は『タイス』を読んだのを「中学の五年生の時分」と書いているが、一九一〇年三月に東京府立第三中学校を卒業、『タイス』をひとまず読み終えたと推測される同年六月の時分⁽¹⁷⁾では、第一高等学校の入学を目指す受験生であった(後に無試験合格)。同年四月(日付不明)の山本喜誉司宛書簡は「とうとう英文科にきめちやつたもう動かないつもりだ」とあり、英文科志望を決めた頃の書簡である。同書簡には「勉強してるだらうね僕は矢張りれさうもないタイスだけは読ンでる」と書かれており、受験勉強の傍ら『タイス』

を読んでいたようである。「尤も議論の面白さなぞは、所々しか通じなかつたらしい」という述懐には、単に扱われている内容が難しかったという意味だけでなく、そもそも英文や英単語が当時の芥川にとって難しかったという側面もあったのだろう。

また、手沢本『タイス』にはこうした単語の書き込みの他に、鉛筆や色鉛筆（赤または紫）の下線の書き入れを二三箇所確認できた⁽¹⁹⁾。芥川は「僕はタイスの行の下へ、無暗に色鉛筆の筋を引いた」と述べているが、筆者の印象では「無暗に」というほどの多々ではない⁽²⁰⁾。下線の箇所は二三頁・一二行目の「[lettuces]」という単語に引かれた下線を除くと、全て登場人物の会話文または会話文中の文章に引かれている。登場人物ごとに内訳を述べると、ティモクレスの言葉に一箇所（二四頁・二三―二五行目）、ドリオンの言葉に二箇所（五一頁・一五―一七行目、五三頁・一六―一九行目）、ニシアスの言葉に四箇所（八五頁・一五―一六行目、一一五頁・五―一〇行目、一二二頁・一四行目から一二三頁・二行目、一三八頁・一―一六行目）、ゼノテミスの言葉に一箇所（一一八頁・二七行目から一一九頁・七行目）、コッタの言葉に一箇所（一二三頁・一九行目から一二四頁・九行目）、パフニユスの言葉に三箇所（一二三頁・一―三行目、二一四頁・一六―二四行目、二二八頁・一六―一九行目）の計一二箇所である。芥川は「当時筋を引いた所はニシアスの言葉が一番多い」と述べているが、確かにニシアスの言葉に最も多くの下線が引かれている。

こうした下線のうち本節で着目したのは、ティモクレスの言葉に引かれた下線（二四頁・一三―二五行目）である。ティモクレスは主人公のパフニユスがアレクサンドリアに向かう道中で出会う、人里離れた小屋に住む隠者であるが、手沢本では次のような彼の言葉に下線が引かれている。

“Friend, I am truly a septic, and of a sect which appears praiseworthy to me, though it seems ridiculous to you. For the same things often assume different appearances. The pyramids of Memphis seem at sunrise to be cones of pink light. At sunset they look like black triangles against the illuminated sky. But who shall solve the problem of their true nature? You reproach me with denying appearances, when, in fact, appearances are the only realities I recognise. The sun seems to me luminous, but its nature is unknown to me. I feel that fire burns—but I know not how or why. My friend, you understand me badly. Besides, it is indifferent to me whether I am understood one way or the other.”

（ロバート・B・ダグラス訳『タイス』（ポドリー・ヘッド、一九〇九）の二四頁・一―二五行目を引用。傍線部が芥川龍之介庫所蔵の手沢本で紫色鉛筆の下線が引かれている箇所。）

「友よ、いかにもわしは懷疑論者じゃ。わしの学派をお前さんは笑うべきものだ」と断ずるが、わしには称賛に値するもののように思われる。それというのも、同一の事物が異なった外観をもつからじゃ。メンフィスのピラミッドは、夜の明けがたには、バラ色の光の錐に見えるが、日暮れがたには、紅と燃ゆる空に、黒い三角形として浮き上がる。じゃが、その本質を誰が

看破しえよう。お前さんは仮象を否定するといつてわしを非難する。ところが、その仮象こそは、わしが承認する唯一の實在なのじゃ。太陽はわしに光り輝くものに見える、じゃが、その本質はわしにはまだわからない。わしは火を熱いと感じる、じゃが、それがなぜであるか、どうしてであるかをわしは知らない。友よ、お前さんはわしを非常に誤解している。しかし、何らかの方法で理解されたところで、それが何になろう」
 (水野成夫訳『アナトール・フランス小説集3《新装復刊》舞姫タイス』白水社、二〇〇〇、二九―三〇頁。ロバート・B・ダグラス訳『タイス』と対応する部分を引用。)

この部分はティモクレスに代弁させる形でA・フランス自身の懷疑主義を表明したものとして受け取れる。メンフィスのピラミッドが明け方と日暮れ方で全く異なる姿を見せることを例に、物事の姿はあくまでも仮象であって本質は誰にも分からないと述べるティモクレスの主張は、当時の芥川にとっても明快なものであったはずだ。

この下線の書き入れからはA・フランスからの影響として指摘されることの多い芥川の懷疑主義が、『タイス』を読んだ一九一〇年の時点で胚胎したものであったことが示唆されよう。

『タイス』はエピクロス派のドリオン、ストア派のユークリイトといった哲学者や、キリスト教の異端であるアリウス派のマルクスなど、様々な思想を持つ登場人物たちが第二篇の「饗宴」を中心に議論を交わす「哲学的物語」であり、芥川が「議論の面白さなどは、所々しか通じなかつたらしい」と述べているのも無理はない。しかし、個々の学説や思想は十全には理解できなくとも、これらの議論が結局、真実や本質へは到達しえない知的「饗宴」に過ぎないことは当時の芥川にも分かつたはずである。その点でも『タイス』の読書を通じて、あらゆる学説や思想を疑う懷疑主義に芥川が目覚めたことは想像に難くないであろう。

四、キリストの人間性と「切支丹物」の胚胎

前節では、手沢本への書き入れから懷疑主義の胚胎を論じたが、芥川は『タイス』を「哲学的物語」としてのみ受容したわけではない。前述したように本作は「一人の聖僧が女を救はんとして奈落に落ちゆく靈魂の歴史を描いた」物語でもあり、芥川におけるキリスト教の受容においてもその端緒を開くものの一つであったはずである。手沢本において主人公パフニユスの言葉に下線が引かれている

のは三箇所だが、それらは全てパフニウスがキリスト教への懐疑に陥る第三篇「とうだいぐさ」に集中している。具体的に述べれば、古代文明の墓場でタイスの幻影に苦しめられるパフニウスが信仰によってのみ救われると自分に言い聞かせる箇所（二二三頁・一―三行目）、祈りのなかでイエスの人間性を認めるに至る箇所（二二四頁・一六―二四行目）、聖者アントニウスのもとに向かう一行の長であるゾジウムに対し、障碍を持つ者や無知の者は幸福であると語る箇所（二二八頁・一六一―一九行目）に下線が引かれている。この手沢本の下線部のうち本稿が注目したいのは、パフニウスがイエスの人間性を認めるに至る次の箇所である。

But thou was born of a woman, and that is why I trust in Thee. Remember that Thou wast a man. I pray to Thee, not because Thou art God of God. Light of light, very God of very God, but because Thou hast lived poor and humble on this earth where now I suffer, because Satan has tempted Thy flesh, because the sweat of agony has bedewed Thy face. It is to Thy humanity that I pray, Jesus, my brother Jesus!

（前掲、ロバート・B・ダグラス訳『タイス』の二二四頁・一六―二四行目を引用。芥川龍之介庫所蔵の手沢本において赤と紫の色鉛筆で二重の下線が引かれていた箇所。）

（安陪注―会話文中、イエスの父への不信を告白し、イエスに縋るほかないと述べたうえで）けれども、あなたは、ひとりごの婦人からお生まれになりました。わたくしがあなたに希望をつなぎますのも、そのためでございます。あなたもかつては人間であられたことを思い出してくださいませ。わたくしはあなたに懇願いたします。それは、あなたが神のなかでの神であられるからでも、光のなかでの光、真の神のなかでの真の神であられるからでもなくて、実は、あなたが、わたくしが今苦しんでいるこの地上で弱くかつ貧しく生きられたからでございます。サタンがあなたの肉体を誘惑しようとしたからでございます。臨終の汗があなたの額を冷たく凍らせたからでございます。わたくしがお祈りするのは、あなたの人間性へでございます、おお、わたくしのイエスよ、わたくしの兄弟イエスよ！

（前掲、水野成夫訳『アナトール・フランス小説集3《新装復刊》舞姫タイス』二四九―二五〇頁。ロバート・B・ダグラス訳『タイス』と対応する部分を引用。）

この箇所は芥川にとって『タイス』の最も印象深い場面の一つであったようだ。彼は晩年「文芸的な、余りに文芸的な」（『改造』一九二七・六）の「三十 野性の呼び声」のなかで「タイイス」の中のパフヌシユは神に祈らずに人の子だったナザレの基督に祈つてゐる」と書いている。この「人の子だったナザレの基督に祈つてゐる」

る」という表現は『タイス』から引用した「わたくしがお祈りするの、あなたの人間性へでございませ、おお、わたくしのイエスよ、わたくしの兄弟イエスよ」というパフニユスの告白を踏まえていると考えてよいだろう。周知の通り、芥川は「西方の人」(『改造』一九二七・八)のなかの「10 父」や「29 ユダ」、「32 ゴルゴダ」において「人の子」としての「クリスト」に言及しており、「31 クリストよりもバラバを」では「彼自身の中のマリア」への「叛逆」を「人間的な、余りに人間的な」叛逆だつたと述べている。こゝうした芥川の「人の子」あるいは「人間的な」クリスト観は、『タイス』に示されるクリストの人間性(ポドリー・ヘッド版では humanity)に端を発するものだつたのではないだろうか。無論、こゝうした芥川のクリスト観は、聖書の影響を抜きには考えられないものだが、一九一〇年の時点で、クリストの人間性という、晩年に顕在化するテーマを、芥川が『タイス』から受け取っていた点は特筆すべきことだと思われる。

さらに『タイス』の受容は、いわゆる「切支丹物」の形成にも大きく関わっているのではないだろうか。芥川は「西方の人」の「この人を見よ」のなかで次のように述べている。

わたしは彼は十年ばかり前に芸術的にクリスト教を——殊にカトリック教を愛してゐた。長崎の「日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に残つてゐる。かう云ふわたしは北原白秋氏や木下

空太郎氏の播いた種をせつせと拾つてゐた鴉に過ぎない。それから又何年か前にはクリスト教の為に殉じたクリスト教徒たちが或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を与へたのである。

ここで芥川はクリスト教に関して「十年ばかり前」には特に「カトリック教」を「芸術的」に愛しており、「それから又何年か前にはクリスト教の為に殉じたクリスト教徒たち」の「心理」への興味を感じていたと述べている。芥川はこゝうしたクリスト教への特異な関心を抱いていた時期を「十年ばかり前」や「それから又何年か前」、即ち「西方の人」が発表された一九二七年から逆算すれば一九一七年前後のこととして述べている。「切支丹物」の嚆矢と言える「煙草と悪魔」が一九一六年五月の『新思潮』に掲載されたことを考えれば、「十年ばかり前」という芥川の回想は頷けるが、こゝうしたクリスト教への特異な関心は、一九一〇年の『タイス』読書の時期に胚胎したと言えるのではないだろうか。重要なのは、芥川が『タイス』を読んだのと時を同じくして北原白秋『邪宗門』を読んでいたと考えられることである。

周知の通り、北原白秋は一九〇八年に新詩社を脱退後、一九〇九年一月創刊の『スバル』に参加、同年三月に易風社から詩集『邪宗門』を上梓した。これは一九〇七年の七月から八月にかけて与謝野鉄幹、木下空太郎らと行われた九州旅行の成果を含む詩集であり、

禁教令下で信仰を守り続けた島原・天草地方の隠れキリシタン（豊臣政権や江戸幕府が呼ぶところの「邪宗門」）が大きなテーマとなっている。白秋が『邪宗門』を上梓したのは、ポドリ・ヘッド版『タイス』が刊行されたのと同じ一九〇九年だが、芥川がこの詩集を読んだのは翌年のことであるようだ。管見の限り、芥川が白秋の『邪宗門』に言及しているのは、山本喜誓司宛書簡の「チユリツプの紅と白とのしほりの八重がちつた、花びらを一つづ、ひろつて、邪宗門の中へはさむだ」という一文だけである。この書簡は年月日不明のため、芥川が『邪宗門』を読んだ時期は推測によるほかないが、手がかりとなるのは『邪宗門』を読んだ時期に散ったチユリツプである。一九一〇年四月二三日付の山本喜誓司宛葉書には「チユリツプが四つともさきました（中略）紅い奴が一つ黄色い奴が一つしほりが二つ」とある。前掲の山本喜誓司宛書簡における「チユリツプの紅と白とのしほりの八重がちつた」という記述はこの葉書の内容を踏まえたものと考えられ、一般的なチユリツプの開化期を考慮すると、芥川が『邪宗門』を読んだのは一九一〇年の五月頃と推測できる。第三節で述べたように、山本喜誓司宛書簡における『タイス』への言及や手沢本における日付の書き入れから、芥川が『タイス』を読んだのは一九一〇年の四月から六月にかけてのことである。つまり『タイス』は一九一〇年の四月から六月、『邪宗門』は同年の五月に読まれたと推定されることから、両作は時を同じくして受容されたと言える。

「西方の人」の「1 この人を見よ」において、芥川は「カトリック教」への「芸術的」な愛という文脈で「長崎の「日本の聖母の寺」に言及し、「かう云ふわたしは北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種をせつせと拾つてみた鴉に過ぎない」と告白している。つまり、芥川は自身の「カトリック教」への「芸術的」な愛が、白秋や杢太郎の作品に代表される、切支丹・南蛮趣味の影響に起因するものであることを自認しているのである。以上を踏まえると、白秋の『邪宗門』とA・フランスの『タイス』が同じ一九一〇年において受容されたことの意味は大きい。即ち「一人の聖僧が女を救はんとして奈落に落ちゆく靈魂の歴史を描いた」物語である『タイス』は、白秋や杢太郎の影響下に形成されつつあった「カトリック教」への「芸術的」な愛と共鳴しつつ、キリスト教の伝説と切支丹・南蛮趣味が融合した「切支丹物」の構築に大きく寄与したと考えられるのではないだろうか。エジプトの高級娼婦であるタイスがパフニユスによって回心するという『タイス』の物語の大枠は、キリスト教の伝説集である『黄金伝説』の「遊女聖タイス」伝に基づくものと考えられ、²⁴『タイス』中に『黄金伝説』への言及はないものの、芥川におけるキリスト教の伝説への興味は『タイス』によって惹起された可能性は大いに考えられる。また、一九一五年一月に出版された水野和一訳『タイス』（警醒社）の「序」で上田敏は、A・フランスについて「千八百六十七年には「黄金伝説集」に材料を求めて、長詩「女優聖タイス伝説」を作り、其後二十余年を経て千八百九十

年に此小説を出した」と述べており、典拠としての『黄金伝説』に言及している。芥川がこの水野和一訳『タイス』を読んだという確証はないものの、本書の上田敏による序文を読んで芥川が『黄金伝説』に関心を抱いた可能性も充分考えられよう。

また、前述の通り、手沢本『タイス』ではキリストへの信仰をめぐって揺れ動くパフニユスの言葉に多くの下線が施されている。こうした聖職者の信仰をめぐる「心理」への関心が、「西方の人」で述べられる「キリスト教の為に殉じたキリスト教徒たち」の「心理」への関心へと結びついたとしても不思議ではない。このように『タイス』によって胚胎したキリスト教の伝説や聖職者の「心理」への関心は、『邪宗門』的な切支丹・南蛮趣味の影響下に形成された「カトリック教」への「芸術的」な愛と共鳴しつつ、後の「切支丹物」の創作へとつながっていったのではないだろうか。

五、おわりに

以上、本稿では芥川龍之介におけるアナトール・フランス『タイス』の受容について考察を試みた。まず、芥川龍之介文庫所蔵の手沢本の書き込みから、芥川に懐疑主義やキリストの人間性というテーマが胚胎したことを論じた。次に、『タイス』と北原白秋『邪宗門』が一九一〇年という同時期に受容された点に着目し、『タイス』によって胚胎したキリスト教の伝説や聖職者の信仰をめぐる

「心理」への関心が、『邪宗門』的な切支丹・南蛮趣味と結びつくこととで、のちの「切支丹物」につながった可能性を論じた。

最も、本稿では『タイス』の「切支丹物」の作品群に対する個別的な影響までは論じていない。この点について手短かに触れておくと、既に安田保雄と松原秀一の研究がある。安田保雄は『タイス』のティモクレスの会話文中に登場する、ガンジス川のほとりに住む隠者の頭髮に鳥が巢を作っていたという描写が、「きりしとほろ上人伝」の主人公「れぷろほす」の設定のヒントになったとし、同作の「三 魔往來のこと」で「えじつと」（エジプト）の砂漠にすむ「隠者の翁」が遊女の姿をした悪魔に誘惑される場面も、パフニユスがタイスの幻影に悩まされる描写にヒントを得たものだと指摘している⁽²⁵⁾。また、松原秀一は「奉教人の死」における「ろおれんぞ」が男性ではなく女性であったと発覚するあらずしに關して、『タイス』読書の影響を指摘している。具体的には『黄金伝説』中の聖女ペラギア伝、聖女マルガリータ伝が「奉教人の死」の典拠となった聖女マリーナ伝と同じく男性の聖職者が後に女性であったことが発覚する話であることを指摘したうえで、芥川が『タイス』をきっかけに『黄金伝説』中の聖女タイス伝を読み、この聖女タイス伝と連続して並ぶ、聖女ペラギア伝、聖女マルガリータ伝を知ったことが、芥川を聖女マリーナ伝へと導いた可能性を論じている⁽²⁶⁾。

もちろん筆者は、こうした典拠考としての研究にも大きな価値があると考えている。しかし、作品への個別的な影響に議論を限定し

てしまうと、思想的影響といった芥川の『タイス』受容における多面性を見逃す可能性もある。こうしたことから本稿は『タイス』初読の時期と考えられる一九一〇年にこだわり、まだ一八歳前後であった芥川の、多方面に及ぶ文学的胚胎についてその可能性を探った次第である。

この『タイス』読書を皮切りに芥川はボドリー・ヘッド版『アナトール・フランス作品集』の収録作品などを通してA・フランスの文学への理解を深めていき、同作品集に収められたジョン・レーン夫人 (Mrs. John Lane) 訳の短編集『バルタザール』の表題作「バルタザール」(第三次『新思潮』、一九二四・二)の翻訳へとつながっていく。ただ、こうした『タイス』読書以後の芥川におけるA・フランスの受容については、本稿の範疇を超えるため、別稿に譲るとにしたい。

【付記】 本稿で引用した文章に使われている漢字については適宜、通用字体に改めた。また、本稿で引用した本文について「仏蘭西文学と僕」は「芥川龍之介全集 第七卷」(岩波書店、一九九六)、「文芸的な、余りに文芸的な」ならびに「西方の人」は「芥川龍之介全集 第十五卷」(岩波書店、一九九七)に拠った。本稿の執筆にあたっては日本近代文学館の芥川龍之介文庫を閲覧する機会を得た。許可を頂いた日本近代文学館に感謝申し上げたい。

注

(1) 後に吉田精一編『芥川龍之介研究』(筑摩書房、一九五八)に収録。

(2) 以下、本稿では作家名としてのアナトール・フランスと、国名のフランスの混同を避けるため、アナトール・フランスを指す場合は「A・フランス」と表記する。

(3) 根津は戦後にも「芥川龍之介とアナトール・フランス」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第一九輯、一九七三・一二)を書き、ゲーオー・ブランドス (Georg Brandes) の『アナトール・フランス』(Anatole France, William Heinemann, 一九〇八)やニコラ・セギュール (Nicolas Ségur) の『アナトール・フランスとの対話』(Conversations with Anatole France, The Bodley Head, 一九二六)を引用しながら、再び芥川とA・フランスの関係について考察している。この論文で根津は両者の間に相対主義 (relativisme) という共通点があることを論じ、考察を深めている。ただ、最終的にはA・フランスに楽観性、芥川に悲観性という対照を見出して、「本質的には互いにかげ離れた作家」と結論しており、両者の類似よりも相違を強調する点において、基本的には戦前の論を踏襲している。

(4) 原題は、*Tizis*。本稿で扱う英訳三冊(ボドリー・ヘッド版、ロータス・ライブラリー版、チャールズ・キャリントン版)も原題をそのまま題名としている。本稿では芥川の「仏蘭西文学と僕」における呼称である「タイス」を用いることにする。また、『タイス』以外のA・フランスの小説に言及する際の邦訳名は原則として『アナトール・フランス小説集』(全一二巻、白水社、二〇〇〇)の邦訳名に従う。小説以外は適宜、邦訳名を付ける。

(5) 安田保雄「芥川龍之介と切支丹」吉田精一編『日本近代文学の比較文学的研究』清水弘文堂書房、一九七二。

(6) 森啓祐「芥川龍之介とアナトール・フランス」『国文学 解釈と鑑賞』第三七巻第一二号、一九七二・一〇。

(7) 広瀬朝光「芥川龍之介とアナトール・フランス―その関連性について―」『愛知大学国文学』第一四号、一九七三・一一。

(8) 本多文彦「芥川龍之介の近代・現代フランス文学涉獵」『埼玉大学紀要』

第三八巻第一号、二〇〇二・九。芥川龍之介とフランス文学の関わりを網羅的に研究したものであり、「11 アナトール・フランス」でA・フランスとの関わりを論じている。

(9) 本稿では以後、芥川龍之介文庫に所蔵のロバート・B・ダグラス訳『タイス』(ポドリー・ヘッド、一九〇九。日本近代文学館の請求記号はA/18925)を、手沢本『タイス』と呼称する。

(10) 唄修「日本におけるアナトール・フランスについての比較文学的考察―資料を通して見たその移植過程(Ⅰ)―」『成城文芸』第三〇号、一九六二・七。また本論文には末尾に「(十四) 日本におけるアナトール・フランス関係文献目録(明治四一年まで)」が付されており、一九〇八(明治四一年)までのアナトール・フランスの日本における紹介の状況に詳しい。

(11) この点については、『芥川龍之介全集 第七巻』(岩波書店、一九九六)の「仏蘭西文学と僕」の注解などで既に指摘されている。

(12) 篠塚真木は「最初に日本人の読者の前に姿をあらわしたアナトール・フランスの作品」がロータス・ライブラリー版『タイス』であったとしたうえで、「中学五年生であった芥川は、すでにこの読者の中に参加している」と述べ、芥川がロータス・ライブラリー版で『タイス』を読んだと受け取れる記述をしている(『芥川龍之介の創作とアナトール・フランス』成瀬正勝編『大正文学の比較文学的研究』明治書院、一九六八)。また、芥川とA・フランスをテーマとした研究ではないものの、田村道美もロータス・ライブラリーについて「芥川龍之介がこの叢書の一つとして刊行されたアナトール・フランス作『タイス』を読んだことは、芥川研究家の間ではよく知られた事実である」と述べている(『野上弥生子と「ロータス・ライブラリー」(一)』『英学史研究』第三二号、一九九八、出版月不明)。

(13) 補足としてチャールズ・キャリントン版『タイス』について述べておく。本書は五〇〇部限定の出版物で、フランスの挿絵画家、マルティン・ファン・メーレ(Martin van Maele)による二一葉の挿絵がついていた。キャリントンは一般にエロティカ(性愛作品)やボルノグラフィ(猥褻作品)

の出版で知られており、挿絵を描いたファン・メーレもエロティカの挿絵で知られた人物である。『タイス』の挿絵も本文とは関係ない性的な内容が描き込まれるなど、エロティカとしての側面を持った出版物であったと考えられ、この挿絵についてはインターネット上の *Erotica Bibliophile* (www.eroticaibibliophile.com) で一覧を確認できる(二〇二五年七月現在)。本稿では詳述する余裕がないが、ボルノグラフィから『タイス』のような古典的作品に及ぶチャールズ・キャリントンの多様な出版活動については、Douglas, Paul. "Charles Carrington and the Commerce of the Risque." *International Journal of the Book*, vol.4, no.2, 2007, pp.63-76. に詳しい。

(14) 以下、『タイス』の篇名、登場する人名・地名等は水野成夫訳『アナトール・フランス小説集3《新装復刊》舞姫タイス』(白水社、二〇〇〇)の表記に従う。

(15) 水野和一訳『タイス』(警醒社、一九一五)の「訳者序」より。

(16) 前掲、水野和一訳『タイス』の上田敏による「序」より。

(17) 手沢本『タイス』の本文末尾(二三四頁)には「5th June 1910, in Katsura」との書き入れがあり、一九一〇年六月五日に避暑・海水浴で訪れていた千葉県勝浦で『タイス』を読了したと考えられる。

(18) 『芥川龍之介全集 第十七巻』(岩波書店、一九九七)、書簡番号23。

(19) 手沢本『タイス』で筆者が実際に確認した下線は以下の通りである。① 二二頁・二二行目、② 二四頁・二二二五行目、③ 五一頁・一五一七行目、④ 五三頁・一六一九行目、⑤ 八五頁・一五一六行目、⑥ 一一五頁・五一〇行目、⑦ 一一八頁・二七行目から一一九頁・七行目、⑧ 一二二頁・一四行目から一二三頁・二行目、⑨ 一二三頁・一九行目から一二四頁・九行目、⑩ 一三八頁・一一六行目、⑪ 一二三頁・一一三行目、⑫ 一二四頁・一六一二四行目、⑬ 二二八頁・一六一九行目、の計一三箇所。頁を跨ぐ下線は一箇所として数えた。単語の書き入れを含めた手沢本『タイス』の書き入れがある頁数については、『芥川龍之介における海外文学受容 旧蔵書越しに見える風景』(ひつじ書房、二〇二五)、三七四―三七六頁に掲

載の表を参照。

(20) 但し、筆者が手沢本『タイス』で確認した下線の多くは、肉眼で何とか視認できる程度の薄さで引かれており、後から消されたものであるようにも見える。そのため、消された下線のうち筆者が肉眼で確認できなかったものがある可能性を言い添えておく。

(21) 手沢本『タイス』の頁数、以下同じ。

(22) 前掲『芥川龍之介全集 第十七巻』、書簡番号26。

(23) 前掲『芥川龍之介全集 第十七巻』、書簡番号24。

(24) 前田敬作・山中知子訳、ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説4』（平凡社ライブラリー、二〇〇六）の「遊女聖タイシス」の記述を参照。

(25) 前掲、安田保雄「芥川龍之介と切支丹」。

(26) 松原秀一『異教としてのキリスト教』平凡社ライブラリー、二〇〇一、四五―五二頁。但し、芥川龍之介文庫に所蔵の英訳本『黄金伝説』、即ち一九一四年にCambridge University Pressより刊行された*The Golden Legend Lives of the Saints*（日本近代文学館の請求記号はA/270）はGeorge V. O'Neillの編集による抄本であり、聖女タイス伝は収録されていない。よって松原の推論が成立するには、この旧蔵書以外で芥川が『黄金伝説』を読んだ可能性を論じる必要がある。

(27) 芥川龍之介文庫に収められているA・フランスの作品、書簡集、評伝は計三八点に及ぶ（日本近代文学館の請求番号ではA/56、A/184、A/185、A/186、A/187、A/188、A/189-1からA/189-30、A/195、A/460が該当）。それらは全て英訳または英語で書かれた書籍であり、そのうち、三四点がボドリー・ヘッドから刊行されている。また、日本近代文学館以外の旧蔵書にも触れておくと、澤西祐典は神奈川近代文学館所蔵の堀辰雄文庫中、芥川の旧蔵書として五点の書籍を同定しているが、このうち三点がA・フランスの英訳書であり、これらも全てボドリー・ヘッドの刊行物である（前掲『芥川龍之介における海外文学受容 旧蔵書越しに見える風景』、二〇〇頁）。